

公民館だより

49.12

◆◆◆ よい役員とは ◆◆◆

四方寿朗

「公民館運動の理想の姿とは」と問われたら 私は「公民館組織が解散すること」と答えた。何さたわけた事と云われるかも知れないが、私の言ひ分き聞いて欲しい。私たちが生活していく上に 是非必要な多くの営習が、住民自らの手で行われるならば 公民館は不要である。球技大会や各種の講座が 自主的な団体の手で行われるようにすれば、公民館のすることはなくする。「みんなたよりない公民館に任せておけるかし」と区民が自から活動を開始するようになれば、私はたよりない公民館役員との非難を尻んで受けたい。

活動の主人公は区民であり、公民館役員はそのお膳立てするのが本旨で、役員だけが参加するのでは真の公民館活動とは言えない。「あの会長に任せておけば、至れり尽せりまで心配ない」と評判のよい役員は、私に言わせれば失格である。

田中総理も遂に退陣を表明した。純真は口々に「十の

題は多い、誰のためでもない婦人自身のための婦人会が過去のいきがかりにとらわれず、婦人自身の手で一日も早く脇に組織されることを望んで止まない。

そして役員のある方についても、みんな考えてよ。由良地己氏の幸せのために。

「バザーと 交換会も終えて」 小室ニミ子

朝夕の冷えニミも日増しに厳しさを増し秋の収穫に冬仕度忙がしい、今日この頃でございませう。

先日の文化祭協賛バザーと交換会開催につきましては皆杯方に大変な協力いただき、又お忙がしい中を多数御来場下さりまして厚く御礼申し上げます。

婦人会活動も時代の激しい推移と共に歩んでまいったわけでございますが、戦時中の口傍婦人会が終戦と共に姿を消し、戦後に敗戦の混沌とした日本を憂う婦人の意欲が各地でもり上って自主的に生まれました。地域婦人会は社会教育団体として行政と共に近代の役員、会員の方々のその時代に即したたゆまぬ努力と活動によって地域の為を貢献しつ、卒業を遂げ現在に受継がれていくわけでございます。

反省五つの大切などと立派な教訓をたれておきながら、裏面ではユウレイ会社を作って脱税し、金権政治の頂尖に立った人物に、どうして日本の将来を任せる事が出来よう。政治を口で自身の手に取りもどそうと、みんなの自覚を促した田中角栄氏は、私の論法からすればよい役員という事にはなるかも知れない。

今年四月に脇の婦人会が解散した。これは何も脇だけの問題ではない。又、婦人会だけの問題でもない。今まで承く続いて来たものが何故つぶれたか、その理由はいろいろ考えられる。(一)地区民の生活が多様化し、団体行動がしにくくなった。(二)婦人の地位が向上し、主婦の息抜きとしての意味が少なくなった。(三)地域の連帯感が薄れ、自分さえよければよいしとの考え方が強くなり、役員に選ばれるようになると退会する人が増えた。(四)直接毎日の生活に影響するような婦人自身の問題がないとの考えが強い。私は決してそうは考えないが、(五)むづかしい問題は男の人に任せて女は家の仕事や子供の世話をするべきだとの考えが地域全体に強い。

以上すべて時代の流れとでも言うべきかも知れない。

戦后約三十年、一見平和やうに見える私たちの生活にも向

す。今私達を取りまく明るく、環境、生活は日頃それを当然のこの様に思ひ、生活して、ますが、それは行政にたずさわる方々の努力は勿論のことですが、その陰にさ、やかでもいたすら婦人の幸福を希って築き上げて来られた先輩方の恩恵をうけて、いることを感じ感謝いたして居ります。

最近では社会環境の変化、物価の高騰、生活様式の上昇、昔から就労婦人が増えてきておりましたが、加えて価値感の多様化や自己中心主義的社会的影響もあり、会員の連帯が弱くなつて、あります。これは一般的な傾向ですが、役員任期が終った直ちに婦人会を脱会するといった様な困った事態が一部に起り、口傍地区の婦人会が崩壊するといった悲しむべき現象が起つてまいりました。この事態について私達婦人会は日頃の活動を深く反省すると共にどの様に対処して、いけばよいのか熱心に話し合いました。今会員の望んでいることは何か、この時代に即した活動はどう進めていけばよいのだろうか、魅力ある婦人会はどういうことなのか等いろいろ考えました。中でも一番胸心の深いのは消費生活ではないだろうか、今高物価により家庭の経済が左迫されてきて、ますますことから消費問題へのとりくみとして、不用品や死蔵品を出し合つて交換会としてみようかと、

うことになりました。これは婦人会員を対象に行うこととし、同時に同会場でバザーを行うことにしました。

バザーの方は一般の方達にも安く暖かいものをあげていただく文化祭の一日を楽しく過して、ただこうとういう意味のものでこの催しによっての収益は一切見込まない方針をとる物品につけるエフも手製にいたしました。集まった物品は役員が先に送ぶということなく会員の友達と同じ条件で送ぶ様に気をつけ作り、この会を催すにあたって役員達は心を一つにしてただ会員の友達に託していただくことを希って出奔いたしました。始めての試みのこととしていろいろの問題がからみ心配されましたが当日会場いっぱいの人を見た時は思わずあつゝいものがこみ上げてまいりました。今日の日の為にいろいろと御協力下さった公民館の方達、不用品を出して下さった会員の皆さん方、又民芸品等をお出し下さった地区の人達、そしてこの会をよりよくする為に忙がしい中をがんばった役員の方々の力が結集して盛り上げた交換会であることとしみじみ感じ本当に有難く感謝致して居ります。

これこそ私達が常日頃婦人会のあり方について模索していたものではないうでしょうか。これこそが婦人会として

上石浦古墳をたずねて

私たちのいるさと、この由良は「近江式」にももの奈具神社をはじめ、古く説教節に謡い伝えられる、さんしよう太夫の伝説、また中世中口地方の将尼子の属領時代から封建領主による搾取の時代の記録ある、は田良湊千野長者等の伝説や、とよく弥生後期の古墳群、近くは千石船の諸記録や製塩、養蚕、製麺等の産業の盛衰等々、遺蹟、伝説史実と数多く伝え古くからひらかれていたことを物語っているようです。

このように遠い先住の人々から今日まで人々の口から口へ、また遺蹟、記録として残されてきたことの一つ一つはわたしたちの心からの生活を考え、いくつうえで貴重なものとも数多く秘めていようと思つたのですが……

そこでこれら一つ一つについてさぐってみようと思つたのがわたしたちの歴史をさぐる会の面々であります

歴史のことについては全くの素人、とにかく手と足で模

の姿ではないだろうかと感じました。

「婦人会忘用論」「役員になり手が無い」、等の言葉が飛び交う中で、この会を進めて参りまして私達の希望が何人であるか、私達は何をなすべきかと私自身も考え、又皆杯にもあえていただけるとの一端緒となれば幸と思つております。

これからの社会情勢はますます、教しく自分一人の力ではどうにも出来ない、大きな問題が山積して、います。

婦人の役割は多く、子供の教育、家族の健康管理、消費問題、食生活、食品公害など数限りなく大切なことばかりです。

これからの婦人会活動は、働く婦人をおまじりにすることなく誰れでもが参加できる諸行事のとりくみ方、又、楽しく学習のできる方法を考え、参加出来る人達にも、活動動員によって常に連帯感を持ち、作らぬ激しく変動する社会を見極め対処する知識を培わなければならぬと思ひます。そして物質的を豊かだけを追い求めることなく、きびしい生活の中にも常にうらおいとゆとりを持ち、心豊かな婦人になる杯をすすめて、かなければならぬと思ひます。

この杯を意味で時代に即応した婦人会として皆杯に盛り

索を続けて約二年がたちました。

この間わたしたち素人なりにまとめたことの一つ一つを順をおってこの場に発表というところ、おこがましいので掲載させていただき、皆さんのご批判、ご高見をお聞かせすることのできれば甚だ幸いと思ひます。

前号では、七曲り八峠について上掲させてもらいました。から今回は、

さんしよう太夫屋敷跡及び近江古墳群についておおよその概観と、近辺との関りについて感じたことをまとめてみようと思ひます。

昨年、所有権のお許しを得、また丹後資料館のご協力をうけ山に入らせてもらいました。

まず坂根さん裏より山に入り、ざっとみただけで四基の古墳がみられ、いづれも弥生後期の古墳でもっとくわしく調べればまだあるようす。後期古墳の折長としては群集して築かれて、いることでしょうか。

なかには荒れに荒された古墳もありました。が採石はたがんで残っていることでしょうか。

この傾面の北側には三基の積石塚をみる事ができました。内一基はくずれておりました。ここに積石塚がある

ということば、これが経塚であれ、また簡単な墓(塚)であれ古墳時代からかなり長期にわたってこの近くに人が住んでいたことを物語っています。

由良川下流のこの地域は比較的なだらかな丘陵とみ出された舌状の台地からなっており、このような地形の所にはその入り込んだ谷間に后期の古墳が築かれているのが特長のようなのです。

そこで、さんしよう太夫屋敷跡の古墳群(ここには三基がみえる)と前期古墳群との関係ですがこの間に山のつき出しがあつて谷を隔てておりますがこのつき出しのふもと部分が低くなつており、谷の様子からみてたぶん一つの基落であつたと考えてよいようです。

ただ兩者の間、各々の一番高い位置にある古墳が同じ高さにある場合は一つの基落に二人の主領格の者がいたか、あるいは二つの基落があつたとも考えられる。また各々のどちらか一方が低いときは一つの基落で主領格の者は一人であつたと考えてもよいようです。

次にこの地形から石浦より川下の土地は由良川デルタとしてあとかうできたのだらうとも云われておりますが、遺蹟あとにあればだけの古墳があることから下石浦にはもつ

充仁陵のような形を後田墳、田墳でも終六のう七の米と大きい。

◎後期古墳——横式石室 群果傾向
◎時代差は前期三世紀——五世紀半

この間に古墳に葬られる者の地位は高かつたが時代を経るにしたがつてクラスはだんだんと下り墳丘を築く力、石室に用いられる石の大きさ(労力)をようして、るものでなければ築けない。この石の大きさによつて葬る者の地位を推察することが出来る。

中期にはクラスも少し下る。後期ではもう少し下つてその数も多くなつてくる(庶民までは下らない)。古墳は最初、一人を葬つたものであつたが、時代を経後期末期頃には家族墓といった形のものに変わってくる。このようにして築かれてきた古墳も、仏教文化の輸入とともに厚葬の弊害を改めよつとする厚葬禁止令が大化二年(六四六)に発せられてからは築造の風もおとろえて、たよつであります。

以上 上石浦古墳群について概要を記してみました。今宵の課題として、わたしたち素人にできる範囲としては

と古墳があるのではとも考えられるのですが、

現在の立地でものを考えるとき、古墳の築かれた当時(弥生后期)には下石浦より下にはデルタ地としてすでにある程度の土地が出来ていたとも考えられ、下石浦の前の田は沼地で耕地としては全々向にあわなかつたのではないかと思われれるのですか。

由良岳のふもとの傾斜面をみると、下石浦の方が面積も広く、古墳時代の人か生活をするのに適していたとすると、后期古墳も終末期には比較的人目につかない所に築かれるという特長から、あの古墳群を築いた人たちの住む基落が必ずしもあみ下にあつたと云え、下石浦近くに住んでいた人たちのお墓であつたとも考えられます。

このことは前期の古墳だと村から見上げられ、村を見おろす位置に築かれますが、后期末期には、だんだんと谷あいに入つていく傾向がみられ極端な例になると、さんしよう太夫遺蹟あとにある古墳のように傾斜面の尾根の部分でなく斜面横側によつた谷間にも築かれるようになってきておりますから……

次に前期古墳と后期古墳の違いとしては、

◎前期古墳——横式、大きな墓塚で大きな古墳 例文は

1. 地図上の位置の記録する
2. 写真として 外観を記録する
3. 既出土物について 写真、実測の記録
4. 近くで出土したものの 今宵するかも知れないものについては何処で 何が どれだけ 何時

のことも記録する
このことは、由良に残る貴重な遺蹟として記録してとどめていきたいと考えております。

この調査について、土地所有の方にお世話になりましたことを、この紙面をかり厚くお礼を申し上げます。とも今宵の記録についてもよろしくお願ひとして稿といたします。
(由良の歴史をさぐる会)

以上